

ワイルドの童話と「窓」

深 澤 清
(加藤学園暁秀高校教諭)

ワイルドの童話集には、*The Happy Prince and Other Tales* (1888) と、*A House of Pomegranate* (1891) の2つがある。筋が単一で教訓的な前者にくらべ、後者は物語が長く、筋もやや入りくんでいて、象徴や寓意に富んでいる。9編の作品を内容からみた時、(1)風刺性の強いもの一物ごとを自己中心的に考える人物への風刺と皮肉が込められているもの。(2)キリスト教的な色彩の濃いもの—キリスト教の愛と献身の尊さを描いたもの。(3)異国的で詩的幻想性の強いものなどにわけられる。作品を通して言えることは、主人公の「死」によって物語が終わる場合が多いことである。もちろん、この死は残酷なおわりを意味するのではなく、別世界での救いを意味することは、周知の通りである。いわば死は別世界へ移行するための契機となる。また、ワイルドの童話には主人公の気持ちや置かれている状況が変化する場合、又はその人物が別世界へ移る時、「窓」(windows)を通して物ごとが展開したり、象徴的な意味が与えられることが多い。以下に作品をとりあげ、「窓」のもつ役割について考えてみたい。

The Happy Prince では、王子はかつて高い塀に囲まれた宮殿に住んでいて、外界のことなど関心はなかった。ところが、像にされ高い場所に置かれた時、一軒家の「窓」を通して苦勞している針子の姿が目に入る。窓は別世界に生きる人々の映像を写し出す画面のような働きをもっている。*The Nightingale and the Rose* では、学生の「窓」の下にはえているバラは、本来赤色であるはずだが、寒さのために咲く見込みがない。Nightingaleの心臓の血で赤く染めることでバラが完成するが、学生は窓を開け、このことに気づく。窓はほりだらけの部屋に外界の空気を入れ、学生に自然の営みを見せる機会を与える。結局学生の恋は実らず、孤独な世界に入っていく。*The Selfish Giant* では、子どもたちを追い出した庭には、春がいっこうに訪れないことを巨人は「窓」を通して気づく。子どもたちが戻り、利己的な自分の行為を反省した時、巨人にとって窓から眺める冬の景色はもはや憎しみの対象ではない。春を迎えるための準備がなされている自然の原理を、巨人は窓を通して知ったのである。*The Young King* では、王は様々な夢を見る。(1)格子のついた窓から日光がさし込み、機織りにかがむ織り手を照らし出す。(2)目が覚め、大きな蜂蜜色の月を窓から眺める。(3)眺の長い灰色の指が窓から見える。(4)輝く月の光が窓を通して部屋に入る。(5)スタンドグラスを通して月の光が王を照らし、王の即位が完了する。

このように、窓からは神の意志が入り、王は身にまとう現世の榮華をすて、神の意志通り王冠を得る。*The Birthday of the Infanta* では、小人が訪れた王女の宮殿は、まぶしい光を遮るために重いカーテンが窓にひかれており、王女が遊び仲間と部屋に戻るの「ドア」ではなく、開いている窓である。

ワイルドの作品において、童話以外にも同様に「窓」が大きな役割をするものがある。*The Happy Prince and Other Tales* が出版される前年、ワイルドは *The Canterville Ghost* という短編小説を発表している。この中では、Ghost は自分が活躍する時代がもはや過ぎ去ったことを嘆き始めるが、その頃から神の意志を伝える鳥が窓のところへ来て、ガラスを打たく。予言が書かれているのも窓であり、少女の助けによって昇天したことが確認されるのも、窓を通してである。

窓が意味するもの—

人間の原初的な生活は言うまでもなく自然と一体であり、雨が降れば肌が濡れ、風の力も直接身体で感じる事ができた。時代とともに衣類で身を包み、快適な暮らしのために家を建て、やがて規模が拡大し共同体を形成する。そして社会が複雑になり利害関係も加われば規則や法律をつくり、そのため *The Happy Prince* に登場する市会議員のような代表も必要となる。自然と隔絶し、自然への挑戦をくり返してきた人間社会に対して、神の愛はそれでもなお注がれ続けている。その霊的な愛は、人間が出入りする「ドア」からではなく、ワイルドの童話では「窓」を通して人々に示されるのではないだろうか。

